

<b>Title</b>	巻頭言 日米関係の特異な歴史
<b>Author(s)</b>	有賀, 貞
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-1
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2203">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2203</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 日米関係の特異な歴史

日米関係の歴史は、際立った特徴をもつ二国間関係の歴史である。近現代の日本の歴史の節目において、アメリカは日本の歴史を左右した国である。幕末から明治維新に至る激変も、アメリカ艦隊来航の衝撃がきっかけとなって始まった。日本が第二次世界大戦後、平和的民主主義国として再出発し発展したのも、アメリカを主力とする連合国に敗れ、アメリカの管理と指導の下に置かれた結果であった。それ以来、日本は60年にわたりアメリカとの二国間同盟を維持して現在に至っている。

それゆえ、日米関係の心理は複雑である。日本人には戦争中に米軍による激しい爆撃を受け、原爆攻撃の対象にもなったという記憶があり、占領終了後も従属的な関係にあったという意識がある。アメリカへの親近感や日米友好は不可欠という認識がある反面、アメリカの力に反感をもち、人種差別を疑い、どの国よりもアメリカを批判しようとする心理も存在する。

他方、アメリカにとっても、日本はアメリカに戦争を仕掛けた唯一の国であり、アメリカの領土に奇襲攻撃に行なって衝撃を与えた国である。パールハーバー攻撃はアメリカの歴史における大事件として、ことあるたびに思い出される。侵略的で信用できない日本人という戦時の対日イメージは占領期の改革の成功によって薄れたが、日本人の民主主義受容は便宜的で表層的なものに過ぎないという見方も存在する。

第二次世界大戦は日米関係に大きな転換をもたらした画期であった。パールハーバーの衝撃はアメリカの1930年代の平和的孤立主義を一掃し、世界秩序維持のためには武力の使用を辞さない軍事的超大国に変えた。他方日本は敗戦により軍国主義国から平和主義国へと変った。またこの戦争はアメリカをアジアに深く引き込むことによって、白人の国から多人種多文化の国へとというアメリカの変化を促進した。戦後のアメリカにおける人種主義の否定と日本の民主的改革とによって、両国民の間の価値観の共通面が拡大した。そのことが、第二次世界大戦後、両国の長期的友好関係を支えてきた基本的要因である。日米同盟もまたそれによって支えられたといえるが、大戦後アメリカには「安全保障文化」、日本では「平和文化」というべきものが形成され、それが双方に違和感を産む原因となった。「一神教国は好戦的」というアメリカ批判も、「頼りにならない同盟国」という日本批判も、その違和感に由来する。ただしこの平和文化は、現実には日米同盟と沖縄の基地負担の上に成り立つものであった。

現在の日本は、依然として世界的超大国であるアメリカと新たな世界的超大国を目指す中国という二つの巨大国家を東西にもつ新しい国際環境に直面している。20世紀初めアメリカが世界的民主主義大国になった時期に、日本は大正デモクラシーを経験したが、世界恐慌によってアメリカの秩序形成力が低下し孤立主義へと後退すると、日本は軍国的権威主義体制をとり、やがてナチス・ドイツと提携した。状況は異なるが、アメリカの威信低下、世界経済の混乱、国際秩序の不安定化という点では、現在の国際情勢は1930年代初頭に似ており、日本の議会制民主政治が危機に直面していることにも類似性がある。日本の民主政治が機能を保ち、アジア太平洋地域の動向を見据えつつ、自ら不安定要因を作り出すことなく、将来の多国間安全保障体制形成のために建設的な役割を果たしていけるかどうかは、日本のにとってはもちろん、アジア太平洋地域全体にとって重要な問題である。